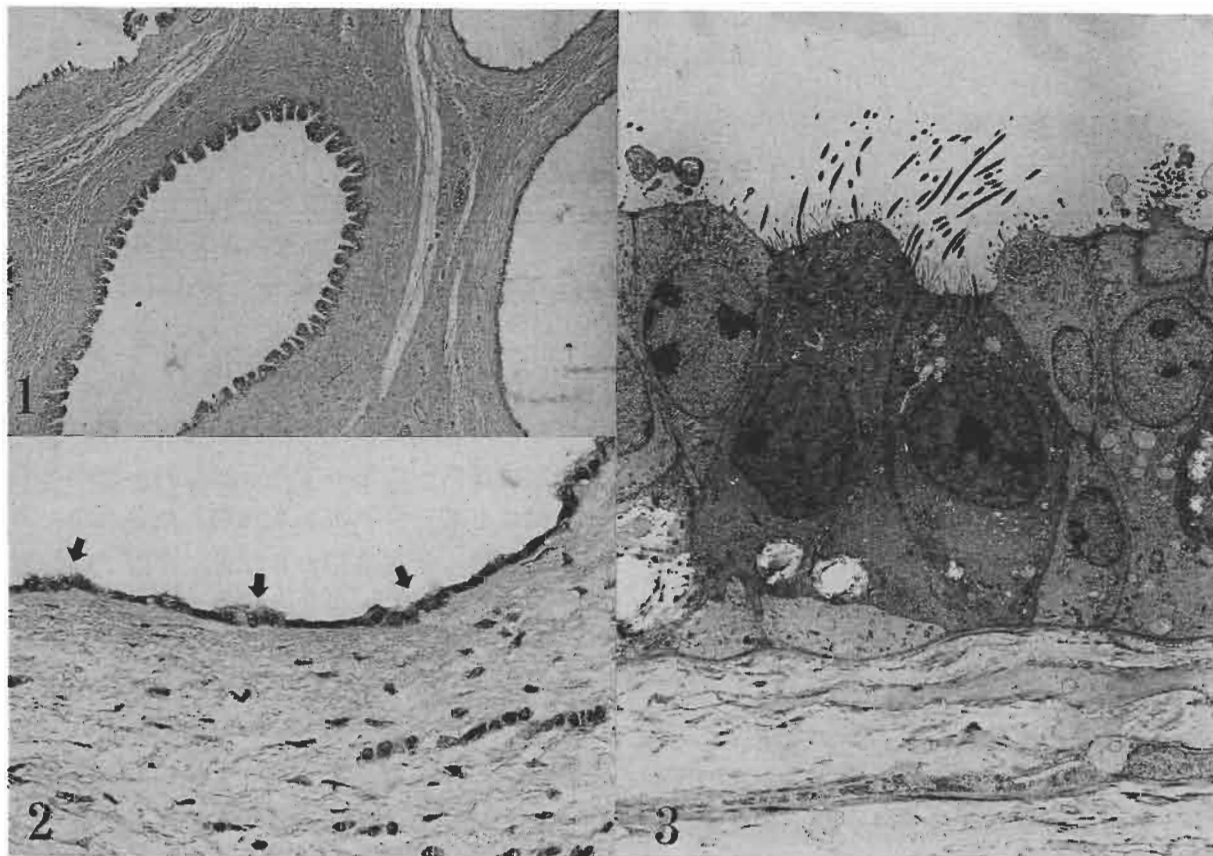


牛の多発性腹腔嚢胞

鹿児島大学農学部家畜病理学教室 出題 第33回獣医病理学研修会標本No.608



動物：牛，黒毛和種，雌，12歳。

臨床事項：1990年9月2日に5産目の子牛を分娩。出産前2ヵ月頃から食欲減退し，出産後も食欲無く次第に乳が出なくなり，10月下旬から下痢が続いた。同年12月24日鹿児島県知覧食肉検査所に病畜として搬入。

剖検所見：推定体重400-450 kg，栄養やや不良，被毛粗剛。解体すると，葡萄房状の嚢胞が左腹壁の横隔膜附着部から左右の下腹部にかけて密発し，さらに脾臓，胃や腸間膜の漿膜面に広がっていた。嚢胞は，直径2-100 mm位で，多くは壁が薄く，無色透明の内容液が充満するが，半透明の壁や暗赤色の内容液を持つものも混在していた。腹水は著変を認めず，胸腔に異常無し。

組織所見：結合織で境された大小の嚢胞の内壁は，立方上皮又は円柱上皮で覆われ，所々に線毛上皮が見られた（写真2）。線毛上皮は概して丈が高く，細胞質は好酸性で，核は円形又は楕円形，有糸分裂像は認められなかった。一部，上皮が多層化し内腔に乳頭腫状の突出を示し，遊離縁に細胞質の突起を認める箇所もあった（写真1）。コロイド鉄染色で

丈の高い上皮細胞の先端部が陽性を呈したが，細胞質内の粘液多糖類の貯留は極く稀であった。砂粒体も稀にみられた。嚢胞の着色は出血やヘモジデリンによるものであった。

電顕所見：線毛上皮の細胞質は概して暗調で，電子密度の高い顆粒やミトコンドリアが核上部に多く見られた。線毛を持たない円柱上皮の多くは明調で，その細胞小器官は細胞先端部や細胞質突起内に集合する傾向があった（写真3）。立方上皮の細胞質内に小塊状の微細線維束や微絨毛で裏打ちされた細胞質内小腔が認められた。

考察：嚢胞の内壁を覆う細胞は卵管上皮細胞に似た線毛上皮と非線毛上皮から成り，粘液産生はほとんど無く，軽度の乳頭腫様構造や砂粒体の存在も認められ，ヒトの卵巣の漿液性嚢胞腺腫と共通点が多い。本例では，卵巣やリンパ節は採材しておらず十分な比較はできないが，第24回研修会に家畜衛生試験場九州支場から出題された「線毛上皮を特徴とする卵巣原発性嚢胞腺癌」とほとんど同じ腫瘍と思われる。**診断：**牛の卵巣原発と思われる漿液性嚢胞腺癌。